

朝鮮時代の大型仏画‘掛仏幀’における材料及び制作技法の研究

—韓国国宝第 297 号 1652 年信謙作『安心寺靈山会掛仏幀』の原寸大古色復元模写を通して—

美術研究科美術専攻

博士(後期)課程

領 域：保存修復

学籍番号：10611

氏 名：韓 希姫

博士論文要約

朝鮮後期の17世紀以降から作例が現れる掛仏幀は、野外で行われる仏教儀式に使用するために制作された巨大な仏画である。朝鮮の混乱した時代を背景に制作されはじめ、朝鮮後期の仏教信仰の特徴は無論、朝鮮後期の独特な仏画制作技法が見られる貴重な資料である。

掛仏幀は世界でも類例の少ない文化遺産であり、伝承されねばならないと思われるが、360余年に亘る歳月の経過の中で、需要の減少や印刷複製技術の発達などにより、掛仏幀制作に用いられた材料と技法は殆ど断絶してしまった。

このように、ほぼ途絶えてしまった絵画文化財の制作に関わる材料と制作技法を再び蘇らせ、保存・継承する方策は、次の通りである。

第一に、該当の絵画文化財が制作された歴史的背景と美術史的価値を十分に理解して作品を分析する。特に宗教絵画の場合は、宗教の特性と時代的背景が材料や技法などと強く関係するため、かかる側面に関する考察が十分になされなければならない。

第二に、原本の現状調査や科学的分析を通じ、制作に使用された材料と技法を解明する。

第三に、調査と分析を通して得られた資料を基にした模写制作を行い、材料と制作技法を記録に残す。

第四に、原本は現状維持を基本方針として、修理を施し保存する。そして以上に加えて、原本が果たして来た機能は、模写作品が代替することで、原本の保全を図る必要がある。

掛仏幀制作に使用された材料・制作技法の記録と資料化を目的とした本研究は、上記の方策に基づき、韓国国宝第297号『安心寺靈山会掛仏幀』を調査・分析し、なるべく原本に用いられた材料と技法による模写制作を行うことに重点を置いた。

模写対象に選定した『安心寺靈山会掛仏幀』は17世紀の超大型仏画を代表する作であり、原本の状態が比較的良好で、掛仏幀の材料と制作技法研究において大きな価値を有している。

名称	『安心寺靈山会掛仏幀』
文化財指定種目・指定番号	国宝 第297号
所蔵先	韓国忠清南都清原郡 安心寺
制作年度	1652年(孝宗3年) 順治九年任辰四月日
制作者	信謙 徳熙 智彦 眞性 信律 三印 敬元 明戒 恵日
法量	総法量 修理前：縦726cm×横472cm 修理後：縦837cm×横481cm
	画面法量 縦631cm×横461.3cm

『安心寺靈山会掛仏幀』は法華系図像の靈山会上図の群図形式を構えており、本尊を中心に多数の聖衆と眷属を配置する朝鮮前期の伝統的様式で描かれている。2005年を前後に修理が施されたようであるが、報告書が作成されておらず、詳しい修理内容や日程などは不明である。全体的な原本の現状は一見良好とは見えるが、修理前の写真と修理後の写真(原本調査時に撮影)を比較すると、修理補修による彩色層の深刻な損傷が進行しており、毎年行われる献掛儀式が損傷を加速化させていると推察される。

顔料分析は試料採取の際に発生する原画の損傷を考慮し、携帯用XRF装置を使用して非破壊調査を行った。『安心寺靈山会掛仏幀』からは水銀(Hg)、硫黄(S)、鉛(Pb)、砒素(As)、銅(Cu)、塩素(Cl)、金(Au)、カルシウム(Ca)が検出され、朱、鉛白、黄丹、鉛丹、石黄、緑塩銅鉱、藍銅鉱、金、胡粉などの彩色材料を用いたと判断される。現在まで調査分析された朝鮮後期の超大型仏画に使用された彩色材料と比較して見ると、用いられた顔料はほぼ同一のものであったと推測されるが、より幅広い科学的調査が必要であると考えられる。

朝鮮後期には多様な基底材を用いた仏画が制作された。掛仏幀制作の盛行により、仏画制作に使用した基底材はもちろん、制作技法にも変化が現れたとみなされる。掛仏幀の画幅制作の特徴は、四つに分けて考えられる。

第一に、主に布を基底材に使用し、平らな床に固定して裏打ちをする。

第二に、最初に画稿を制作し、裏打ち、彩色の手順で制作する。

第三に、下絵が肌裏紙になる。

第四に、紙や布などを用いて20～30回の裏打ちをする。

掛仏幀の裏打ちは朝鮮後期に制作された巨大な仏画の画幅を制作する独自の技法であり、重要な工程であるため、本論文では全工程を再現し、記録した。

模写制作は原本と随時対照・観察しつつ行うのが理想であるが、現実的には不可能な場合が多い。また、写真資料や影印本などは印刷機により色彩の差が激しく、色見本を作製し、それを基準として原画に近い色調を再現した。掛仏幀の彩色は高麗仏画の代表的彩色技法である裏彩色技法を用いていないということ、厚塗りの彩色をしていないという二つの特徴がある。

以上のように本論文では『安心寺靈山会掛仏幀』の科学的分析と調査を基礎に、原寸大古色復元模写を実施し、掛仏幀制作に使用された材料や制作技法を研究・記録し、資料として提示した。また、資料のデジタル化が急速に進展する中、それを踏まえて断絶しつつある絵画文化財の制作に関わる全般、つまり、材料とその使い方、伝統材料を使用した制作技法などの保存と継承方法に関して論じた。本研究が今後、絵画文化財の復元制作における材料と技法研究進展の礎になり、途絶えた伝統を蘇らせ、先祖から受け継いだ文化遺産を後世に継承し、発展させる契機となることを願って止まない。